| 報告番号 | ※　　第　　号 |
|---|---|

# 主　論　文　の　要　旨

論文題目　空名の指示の理論と現代フレーゲ主義の可能性

氏　　名　成瀬　翔

## 論　文　内　容　の　要　旨

言語哲学において、単称名の指示の問題は、言語表現と実在との接点が問題となる重要課題とみなされてきた。フレーゲは、単称名の意味論的機能を、指示機能に相当する「意味（Bedeutung)」と、それを与える「意義（Sinn)」という二つのアスペクトに分割し、独自の意味論を形成したことで知られている。フレーゲの理論において、意義は、[1] 文の真理条件、[2] 言語表現の認知的重要性、[3] 言語表現の理解の内容、[4]（非外延的文脈における従属節の）間接的意味、という役割を担う。しかし、指示対象をもたない名前（空名）ケースでは、そのような名前は意義をもつが意味はもたないとフレーゲは認めなくてはならない。そのため、言語表現から実在への道筋が閉ざされ、真理値の間隙（truth-value gap）を受け入れざるを得ない。

本論文では、意義の重層構造がフレーゲ的意味論に危機をもたらし、空名のケースにおいて顕在化することを示す。そして、現代の言語哲学がフレーゲ的発想を継承し、言語表現と実在との意味論的関係をもとに構成されている以上、空名の問題はわれわれの前に立ちはだかる課題とみなされなくてはならない。

そこで、この問題を解決するために、本論文ではフレーゲ的発想を生かした、ルイスの可能世界意味論、パーソンズのマイノング主義、ペリーの反射的指示説を検討し、反射的指示説を除く可能世界意味論とマイノング主義が、いずれも問題を含み、フレーゲ的意味論を擁護するための理論とみなしえないと論じる。ルイスの可能世界意味論とパーソンズのマイノング主義はいずれも、理論の根幹において「ふりをすること」という語用論的行為をインプリシットに導入しており、意味論的枠組みにおいて空名を説明することに失敗する。

本論文では、この「ふりをすること」という語用論的概念を中心に据えた、ケンダル・ウォルトンの理論によって空名の問題を解決することを目指す（Walton 1990)。ウォルトンの基本的アイディアは、空名の使用を子どもの「ごっこ遊び（game of

ペリーのフレームワーク上で展開されたウォルトンの理論では、マイノング主義や可能世界意味論などが想定する虚構的対象にコミットする代わりに、言語活動の社会的・歴史的ネットワークを導入し、歴史的・社会的事実（historical-social fact）の集合にコミットする。この歴史的・社会的事実は、言語使用の連鎖によって形成されたネットワークによって担保されている実在物とみなされる。本論文では、この歴史的・社会的事実に依拠して、われわれが想像や行為を行っていることを明らかにする。このことは、虚構的存在者へのコミットメントによって確保するコミュニケーションの可能性を、ペリーのフレームワーク上で展開されたウォルトンの理論ももちうることを示す。

このように、ペリーのフレームワーク上で展開されたウォルトンの理論の理論は、虚構の社会性を明らかにすることができる。われわれがごっこ遊びをするとき、そのごっこ遊びの参加者集団の中で、相互信念によって結ばれた共有された虚構的事実が生じる。その虚構的事実は、ネットワークを通じて、社会的事実として保持される。本論文では、サールやトゥオメラの共同性の哲学を通じて、ウォルトンの理論が明らかにする虚構の共同性をより精密に取り出し、ペリーのフレームワークを用いて、その社会性をネットワークに参入することとして説明した。ある空名の使用し、なにかを想像をするということは、その使用者が生きている時代と社会に蓄積されている社会的事実に、インプリシットに従っているというのが本論文の結論である。

この統一されたフレームワークによって、主体の認知的作用が分析可能になるだけではなく、間主観的な情報の受け渡しや共同体を通じた行為の分析が可能となると思われる。したがって、談話内において話者と聞き手が「信じることにする」という虚構から、共同体全体で保持している「信じることにしている」という虚構まで、統一的に、〈メイクビリーヴ〉という観点から扱うことができるフレームワークを構築することが可能となる。

本論文において、空名の指示の理論は、言語表現と指示対象の関係によって汲みつくされるものではなく、社会的に保持されている空名についての言説にまでさかのぼらなくてはならないという結論に至った。「われわれは空名を使用してなにをしているのか」という問題は、狭義の〈言語哲学〉の問題ではなく、主体の共同性・社会性の視座を含む、より広い哲学的パースペクティヴのもとで論じられなくてはならない。本論文は、その道筋を示すにとどまり、内実については今後の課題としなくてはならない。しかし、空名の指示という、言語哲学に限定された問題が、哲学全般におよぶ広大な実りある土壌に根差していることを明らかにすることができたと思われる。